

これからの地域建設業―米田雅子慶応大学教授に聞く

建設投資が急速に縮小していく中で、地域の建設業が今後どうなるべきかを慶応義塾大学の米田雅子教授に聞いた。米田教授は、建設業以外にも本業を持つ「複業化」によって経営や雇用の維持し、地域に必要な企業とされる企業として生き残っていくべきだと言った。

そこで、一つの本業だけでなく、建設業を営みながら農業など別の本業を持ち、複業化によって自立性を高めなければならない。建設業も農業も1年を通して忙しいわけではない。二つを組み合わせて仕事の量を平準化し、年間雇用を実現するべきだ。地元のみならず、発注者は、発注時期をずらし、農繁期には事業を減らすと

ドや農業、介護など、あれこれ取り組み、生き延びを図っている会社がある。地域の実情として、建設業を営みながら、もつからなくても農業も手掛ける会社に残ってほしいは、地域に必要な企業として、建設業の生き残りのため、企業が力を合わせ、農商連携の戦略となる。農業の採算だけを切り取って議論するより、農業をやるに当たって、地域の人が喜ばれているかが重要。そう、その際の問題の一つは行政の縦割りの弊害だ。

プロの農家でも農業で食べていけないのに、建設業から転身して自立していくのは難しい。林業も産業として低迷しており、働く人の所得水準は高くない。介護も報酬が非常に安い。建設業で家族を支えていた人が、これらの仕事で同じ収入を得ていくのは難しいのが現実だ。

■縦割りの弊害
地域が力を合わせ、農商連携の戦略となる。農業の採算だけを切り取って議論するより、農業をやるに当たって、地域の人が喜ばれているかが重要。そう、その際の問題の一つは行政の縦割りの弊害だ。



米田雅子教授

地域で必要とされる企業に

農業者も林業も介護も成長産業になる。しかし、それは中長期的にみての話。そこで、地方の建設会社は、一つの会社が複数の本業を持つ「複業化」を目指すべきだと考える。

■あれもこれも
鹿児島県では、公共工事が少ない時期に手掛けられる仕事として、複数の建設会社がラッキョウを栽培している。また、青森では、温泉の熱を利用してクリスマスケーキ用のイチゴを作り、工事のない冬場に収穫して東京の市場に出荷している。そういった工夫の中に自立の芽が生まれる。

■縦割りの弊害
地域が力を合わせ、農商連携の戦略となる。農業の採算だけを切り取って議論するより、農業をやるに当たって、地域の人が喜ばれているかが重要。そう、その際の問題の一つは行政の縦割りの弊害だ。

■縮小するマーケット
マーケットが大きくなっていくのであれば、仕事を専門分化していくことで効率上がる。しかし、地方でいま起こっているのはそれとは逆の状況だ。人口減少や少子高齢化によって働く人が少なくなると、マーケットが縮小していく。

農業ではこれまで、個人レベルで建設業との兼業があった。平だけ少なくし、業種間の壁も取り除くべき。省庁横断の取り組みは政治主導でないといけない。現政

■縦割りの弊害
地域が力を合わせ、農商連携の戦略となる。農業の採算だけを切り取って議論するより、農業をやるに当たって、地域の人が喜ばれているかが重要。そう、その際の問題の一つは行政の縦割りの弊害だ。

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

政治主導で進めるべき
省庁横断の規制緩和

市場の縮小に 複業化で対応を